授業展開例（国語科）

1　校種・学年　　中学校・第３学年

2　単元名　「近現代の短歌・俳句　『読もう・詠もう　短歌・俳句』」

3　単元について

（1）単元(教材)観

本単元は，「中学校学習指導要領」国語科　第３学年の「C　読むこと（1）ア　文脈の中における語句の効果的な使い方など，表現上の工夫に注意して読むこと。ウ　文章を読み比べるなどして，構成や展開，表現の仕方について評価すること。」を受けて設定するものである。

ここで取り上げるのは近現代の短歌と俳句である。古くから日本で親しまれてきた伝統的な詩形である短歌や俳句は，現代の生活にも根付いており，特に五・七・五等の定型のリズムは日常的によく見聞きしている。一方，字数（音数）が限られている上に，用いられる言葉自体も難しいため，中学生にとっては情景や心情がイメージしにくい場合も多い。また，逐語訳的な意味の理解では，表面的な解釈に終わってしまうおそれもある。つまり，短歌や俳句を十分に味わうためには，季語や切れ字，枕詞といった特有の表現を的確に捉えるとともに，歌が詠まれた背景を踏まえて読むことが重要である。また，これらの詩形は，ごく短い定型の枠の中で表現されるものでありながら，その作者ならではの「歌風」がくっきりと表れるものでもある。したがって，「表現上の工夫に注意して読む」「文章を読み比べて，表現の仕方について評価する」といった本単元で身に付けさせたい力を指導するために好適な題材であると考えられる。

（2）生徒観

本単元で学習する短歌や俳句といった日本の伝統的な定型詩については，小学校において既習であることに加えて，中学校１年次には詩を，２年次には短歌を学習している。特に，中学校２年次は，正岡子規，与謝野晶子，石川啄木の代表歌を一首（本時とは別の歌）ずつ取り上げ，抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句に注意して読む学習や全体と部分との関係，例示や描写の効果などを考え内容の理解に役立てる学習をしている。このような学習の積み上げの上に，生徒は折に触れて「百人一首」を楽しんだり，行事の体験を川柳で詠んだりしており，定型のリズムにはよく慣れ親しんでいる。しかし，短歌や俳句に特有の修辞等の表現を的確に捉え，短く抽象性の高い言葉から，そこに込められた情景や作者の心情をイメージする力は十分ではない。

本学級生徒の２年次における県「基礎・基本」定着状況調査では，平均通過率が 84.8%（県平均 81.0%），今年度の全国学力・学習状況調査（自校採点）では，国語Ａの平均正答率が 79.3%，国語Ｂは 67.5%であった。基礎的な知識・技能は概ね定着しているものの，それらを活用する力には課題があると考えられる。また，国語を極端に苦手にしている生徒も複数名おり，学級内の学力差は大きい。**この様な学力差を乗り越え，一人一人の生徒が「表現上の工夫に注意して読む」「文章を読み比べて，表現の仕方について評価する」力を身に付けるとともに，授業の中で，他者と関わりながら，自己有用感をしっかり持ち，自分も他者も共に認め合うことができるようにしていきたい。**

（3）指導観

本単元では，「学習指導要領」に示された言語活動例から，「（2）ア　物語や小説などを読んで批

評すること」を取り上げる。

第一次では，複数の資料から短歌の作者を推理させる学習課題を設定し，他者と協力することで新たな考えに到達する協調学習の手法である知識構成型ジグソー法を用いることにする。知識構成型ジグソー法の考え方は，人が複数名で同じ課題を解決しようと話合いながら考える学習を基本とする。**話合いながら考えると人は誰かにもっと話したくなる。話し手は自分の考えを見直してより良いものにしたくなり，聞き手は自分の考えに相手の考えのいいところを統合しようとする。この建設的な相互作用を繰り返すと，一人一人が話合いの前より後の方が，考えの質が上がっていくであろうという考えである。この知識構成型ジグソー法の考え方は，考えの質を高めるとともに人権教育の視点からも効果が期待できる。その第一は，自分の考えを途中段階でも持ち寄ることができ，他者にその意見を聴いてもらい，良い意見は他者に取り入れてもらえることで自己を肯定的に見たり，誰かの役に立っているという有用感を育成することが期待される。第二に，他者から受け入れられ話を聴いてもらい，協同で考えを修正・創造していくことで，他者の良さや大切さに気付き，お互いを認め合い，共に生きる学級集団への信頼につながっていくことが期待される。**

そこで，この建設的相互作用を，参加した誰もが体験できるよう次の四段階を仕組むことにする。

第一段階は，エキスパート活動を行う。エキスパート活動とは，課題解決のための複数の多面的な資料（本単元では課題に迫る３つの異なる資料（エキスパート資料））を用意し，生徒は３～４人のグループを作り，グループごとに異なる１つの資料について協同で考える活動である。この活動では，資料をもとに話合いながら考えていくので，自信がなく不安な生徒も安心して授業に参加できる。また，自信のある生徒は，資料の読み取りやそこから導く考えを他者に説明する中で論点を整理することができる。この活動の後に行われるジグソー活動の中で，担当した資料について，各自が責任を持って説明できるように資料からの読み取りとそこから導く考えを共有化することが重要となる。第二段階は，ジグソー活動を行う。ジグソー活動とは，エキスパート活動をしたグループとは別々に分かれ，異なるエキスパート活動をした者どうしが新たに３～４人一組のグループを構成する。新しいグループでは，各々エキスパート活動で資料から読み取ったことや考えを持ち寄り，課題解決の話合いを行う。この活動を行い多面的・多角的に意見を交流する中で，自分の考えを見直し，他者の考えの良いところを自分の考えに統合して，自分達のグループの考えをまとめて行く。第三段階は，クロストークを行う。クロストークとは，各グループでまとめた考えを学級全体で交流する。この活動の中で，多グループの考えとその根拠を聴き，質疑応答を行うことで，多様な見方考え方を学び，考えを再修正したり，新たな知を創造して行く。第四段階では，これらの話合いを踏まえて，自分は最終的にどのように考えるのか，結論を出していく。

本単元のエキスパート活動では，異なる３つの資料（資料Ａ：石川啄木に関する資料，資料Ｂ：与謝野晶子に関する資料，資料Ｃ：正岡子規に関する資料）から，各歌人がどのような人物であったのか，どのような特徴の歌を残したのかを協同で読み取らせる。ジグソー活動では，エキスパート活動での資料や意見を持ち寄り，短歌の作者を推理させる。作者が誰なのか，また「そう考える理由」と共に，なぜそれ以外の人が違うと考えるのか「そうでないと考える理由」についても話し合わせたい。これらの学習が，歌に込められた情景や心情をより豊かに想像し，短歌をより深く味わうことにつながると考える。第二次では，自分の好きな短歌を取り上げて鑑賞文（批評文）を書かせる学習活動を設定し，紹介し合わせる活動を行う。単元のまとめとなる第三次では，一人一人に俳句を詠ませ，相互評価させる「句会」を行う。自分で「詠む」体験が，詩歌をより深く味わって「読む」ことにつながると考えている。

4　単元の目標

○　短歌や俳句に関心を持ち，詩歌の中の言葉を手がかりに想像を働かせながら読み味わおうとする。

【国語への関心・意欲・態度】

◎　短歌や俳句を読み，それら特有の表現に注意しながら，具体的な言葉や表現に即して情景や心情を想像する。　【C　読むこと　ア】

○　さまざまな詩歌を読み，作品の特徴や好きな理由等をまとめ，作品を評価する。

【C　読むこと　ウ】

○　短歌や俳句の学習を通して情景や心情を表現するための語彙を増やし，語感を磨く。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項　イ（イ）】

5　単元の評価規準

ア　国語への関心・意欲・態度	イ　読む能力	ウ　言語についての知識・理解・技能
①　短歌や俳句に関心を持ち，詩歌の中の言葉を手がかりに想像を働かせながら読み味わったり，学習したことを生かして自分の作品を詠もうとしたりしている。	①　短歌や俳句を読み，それら特有の表現に注意しながら，具体的な言葉や表現に即して情景や心情を想像している。 ②　さまざまな詩歌を読み，作品の特徴や好きな理由等を文章にまとめている。	①　短歌や俳句の学習を通して，情景や心情を表現するための語彙を増やし，語感を磨いている。

6　指導と評価の計画（全７時間）

次	学習内容	時数	評価の観点			評価規準〔評価方法〕
			関	読	言	
一	1　単元の学習計画を知り，一次の学習課題をつかむ。短歌や俳句についての既習事項を振り返る。	2	○			ア①短歌や俳句に関心を持ち，詩歌の中の言葉を手がかりに想像を働かせながら読み味わおうとしている。〔観察〕
	2　作者の生き方や表現の特徴をもとに短歌を解釈する。（ジグソー法） 本時（２／２）			◎		イ①短歌の表現上の特徴や歌の詠まれた背景をふまえ，歌に込められた情景や心情を想像している。〔観察・ワークシート〕
二	1　教科書の俳句を音読し，大まかな歌意をとらえる。 2　好きな俳句を選び，鑑賞文を作る。 3　鑑賞文を交流する。	3		○ ◎		イ①俳句に特有の表現に注意しながら，具体的な言葉や表現に即して情景や心情を想像している。〔観察・ワークシート〕 イ②さまざまな詩歌を読み，作品の特徴や好きな理由等を鑑賞文にまとめている。〔観察・ワークシート〕
三	1　俳句を創作し，評価し合う。（句会）	2	○		◎	ア①短歌や俳句に関心を持ち，学習したことを生かして自分の作品を詠もうとしている。〔観察・作品〕 ウ①短歌や俳句の学習を通して，情景や心情を表現するための語彙を増やし，語感を磨いている。〔観察・作品・ワークシート〕

7　本時の展開

（1）題材名　　「『この歌の作者はだれ？』　近代短歌の鑑賞」

（2）本時の目標

○　教科の目標

作者の人物像や表現の特徴を手がかりにして，短歌に込められた情景や作者の心情を想像し，短歌を味わう。

○　人権教育の視点

他者と関わりながら，自己有用感をしっかり持ち，自分も他者も共に認め合うことができる。

（3）評価規準

・資料から読み取った作者の人物像や表現の特徴をもとに，グループや学級での話合いを通して，作品の特徴や良さに気付き，短歌に込められた情景や作者の心情を想像している。

・グループの中で，自分の意見や考えを相手に配慮しながら表現している。

・相手の話を，最後まで傾聴し，相手の意見や考えの良いところを認め，積極的に取り入れている。

（4）本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点 （◆支援を必要とする生徒への手立て）	評価規準 〔評価方法〕
導入	1　既習内容を確認する。 2　本時のねらいと学習課題を確認する。	○短歌の定義，表現技法，知っている歌人などを出し合わせる。 ○前時の学習を想起させる。	
	目）作者の人物像や「作風」から，短歌に込められた情景や作者の心情を想像しよう。		
	課）「作者をさがせ！」　この短歌は誰の作品でしょうか。また，それはなぜですか。説明しよう。 **瓶にさす　藤の花ぶさ　みじかければ　たたみの上に　とどかざりけり**		
展開1	3　エキスパート活動を行う。 ○３人の歌人に関する資料を読み取り，ワークシートにまとめる。 資料Ａ：石川啄木についての資料 資料Ｂ：与謝野晶子についての資料 資料Ｃ：正岡子規についての資料	○課題追究のために必要な情報は何かを意識しながら読ませる。（どのような人生を送った人か？　どのような歌をつくった人か？） ○エキスパート活動での自分の読み取りが，後の課題解決に必要不可欠な情報であることを自覚させる。 ◆机間指導を行い，机間指導を行い，読み取りが進まないグループには読み取る視点を絞らせるなど必要に応じて支援を行う。	○資料から作者の人物像や表現の特徴を適切に読み取っている。 〔観察・ワークシート〕

・A…20歳で詩集を刊行したが，詩や小説では成功しない。生活は苦しく，貧困と病が人生に暗い影を落とした。「一握の砂」でようやく歌人として名声を得た矢先，肺結核にかかり，26歳で亡くなった。

歌風【身近な生活の中で感じた率直な思いを平易な言葉でつづった。】

・B…与謝野鉄幹の短歌に魅せられ，短歌を発表。鉄幹への恋心。戦争賛美の戦時下で，堂々と人間の尊厳，命の尊さを訴えた。詩歌だけでなく，小説，童話等でも才能を発揮。63歳で亡くなった。

歌風【自らの恋心を大胆かつ情熱的に詠む。若者を中心に新しい生き方への目覚めを促した。】

・C…上京後，短歌・俳句を作り始めた。21歳の時結核にかかり，病と闘いながら精力的に創作。晩年は寝たきりになったが，病床でも多くの優れた作品を残した。36歳で亡くなった。

歌風【できるだけ主観を排し，目の前の風景，事物をありのままに言葉で表現する「写生」を重視。】

展開2	4　ジグソー活動を行う。 ○それぞれ別の資料でエキスパート活動を行った者どうしが，新たなグループになり，それぞれの資料から読み取ったことや考えを交流する。	○はじめに，自分の資料をみんなに見せ，読み取ったことや自分の考え，判断した理由を説明させる。 ○仲間の考えをしっかり聞かせた上で，「なぜこの歌なのか」「なぜこの歌ではないのか」両面から，話し合うようにさせる。 ◆話合いがまとまらないグループには，互いの意見の相違点に着目して話し合わせるなどの支援を行う。 ・グループの答えとその理由をホワイトボードにまとめさせる。	○グループの中で，自分の意見や考えを相手に配慮しながら表現している。 ○相手の話を，最後まで傾聴し，相手の意見や考えの良いところを認め，積極的に取り入れている。
展開3	5　クロストークを行う。 ○グループでまとめた答えとその理由を発表する。 6　最終的な自分の考えを書く。	○互いの答えの良さや課題を出し合わせ意見交流させる。 ○答えと理由について，共通点をもとにグループ化させる。 ○クロストークをもとに各自の考えをまとめさせる。	○グループや学級での話合いを通して，作品の特徴に気付き，短歌に込められた情景や作者の心情を想像して，文章で適切にまとめている。 〔観察・ワークシート〕

・この短歌は花瓶に挿した藤の花房という目の前の情景をありのままに描き，作者の思いを直接表す言葉はないという特徴があります。また，藤の花房が畳に届かないことに気付くということから作者が病で横になっていることが想像でき，花房の短さに自分の命を重ねているような作者の心情が感じられます。そういうことから，この短歌の作者は正岡子規です。

まとめ	6　本時のまとめを行う。	○適用課題を考えさせる。	
	用）次の短歌と俳句は誰の作品でしょうか。また，それはなぜですか。考えてみよう。 友がみな　われよりえらく　見ゆる日よ　花を買ひ来て　妻としたしむ いくたびも　雪の深さを　尋ねけり		
	7　振り返りと次時の予告を行う。	○本時の振り返りを書かせる。	

（　　）番　名前（　　）

課）「作者を探せ！」　この短歌は誰の作品でしょうか。また、それはなぜですか。説明しよう。

瓶にさす　藤の花ぶさ　みじかければ　たたみの上に　とどかざりけり

学習1　資料から課題追究に必要な情報を取り出し、グループで交流しよう。

【エキスパート活動】

自分が読み取った情報

ジグソー活動に持参する情報

学習2

グループで話し合い、課題の答えと理由をまとめよう。【ジグソー活動】

作者は

理由は

学習3

クラス全体で意見交流を行い、みんなでベストアンサーにまとめよう。【クロストーク】

資料A

石川啄木（いしかわ・たくぼく）

一八八六（明治十九）年～一九一二（明治四十五）年。

岩手県渋谷村出身。本名は一。

中学を中退して上京。二十歳で詩集「あこがれ」を刊行して注目を浴びるが、生活が立ち行かず無念の帰郷。結婚し、母校の渋民小学校の教師として働き始めたが、一年で解雇されてしまう。

その後、故郷を離れ、函館など、北海道の各地を転々とすることとなった。こうした放浪生活の中でも、啄木は文学の道をあきらめきれず、再び上京を試みた。しかし、上京後に書いたいくつかの小説が日の目を見ることはなかった。

ようやく新聞社に職を得たが生活は苦しく、貧困と病は、その人生に暗い影を落とした。明治四十三年、朝日新聞の「朝日歌壇」（短歌の投稿欄）の選者に抜擢された。これを機に、歌人の道を真剣に模索する。同年、第一歌集「一握の砂」を刊行。身近な生活の中で感じた率直な思いを平易な言葉でつづった独自の歌風が高く評価され、ようやく歌人としての名声を得る。

しかし、こうして夢がようやくかない始めた矢先、肺結核にかかり、二十六歳の若さでこの世を去った。死後刊行された歌集に「悲しき玩具」がある。

石川啄木の代表歌

はたらけど　はたらけど猶　わが生活　楽にならざり　ぢつと手を見る

働いても、働いても、それでもなお、私の暮らしはいっこうに楽にはならない。……じっと自分の手を見つめる。

やはらかに　柳あをめる　北上の　岸辺目に見ゆ　泣けとごとくに

（この美しい景色を見ていると）柳の芽がやわらかく青く色づいた（ふるさとの）北上川の岸辺の光景が目に浮かんでくる。まるで（故郷をなつかしんで）泣けと言っているかのように。

資料B

与謝野晶子（よさの・あきこ）
一八七八（明治十一）年～一九四二（昭和十七）年。
大阪府堺市出身。本名は晶。

文学好きの一少女の人生を大きく変えたのは、新聞に掲載された与謝野鉄幹の短歌であった。人間らしい感動を率直にうたう鉄幹の歌に魅せられた晶子は、明治三十三年、鉄幹の主宰する雑誌「明星」に短歌を発表し、その後、大阪を訪れた鉄幹本人と出会った。鉄幹への尊敬の念はやがて恋心へと変わり、晶子は家を出て上京、鉄幹と暮らし始める。

同年、第一歌集「みだれ髪」を発表。自らの恋心を大胆かつ情熱的に詠んだ青春歌は、若者を中心に新しい生き方への目覚めを促し、大きな反響をよんだ。

明治三十七年、日露戦争のさなか、旅順（中国東北部の都市で日露戦争の激戦地）で戦う弟へ向けた詩「君死にたまふことなかれ」を発表。戦争賛美の戦時下で、堂々と人間の尊厳、生命の尊さを訴えた。

その後、詩歌にとどまらず、小説、童話、古典研究にまでその才能を発揮したが、鉄幹の死の七年後、六十三歳で永眠した。

死後刊行された「白桜集」には、鉄幹の詩を悼む歌が数多く収録されている。

与謝野晶子の代表歌

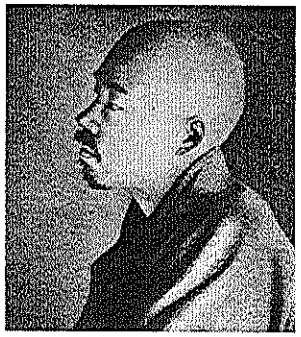
なにとなく　君に　待たるる　ここちして　出でし　花野の　夕月夜かな

何となくあなたが待ってくれているような気がして家の外に出てみました。花の咲く野原に美しい夕月が浮かぶ夜に。

やは肌の　あつき血汐に　触れも見で　さびしからずや　道を説く君

ねえ、熱い血潮の流れるこの私のやわらかい肌に、触れてみもしないで……そんなのさびしくないの。まじめに人の道を説いてばかりいるあなた。

資料C



正岡子規（まさおか・しき）

一八六七（慶応三）年～一九〇二（明治三十五）年。

愛媛県出身。本名は常規。

はじめ政治家を志して上京。その後、文学に目覚め、短歌、俳句を作り始める。夏目漱石とも交流があった。

二十一歳のとき、結核にかかり、それ以来、子規と名のるようになった。「子規」とはホトトギスのことで、病気で吐血した自分と、「鳴いて血を吐くホトトギス」（中国の故事による）といわれるホトトギスを重ね合わせた雅号（ペンネーム）である。

その後、病とたたかいながらも精力的に創作に取り組む。

子規が詩において重視したのは、「写生」という考え方であった。これは絵画における写生と同じように、できるだけ主観を排し、目の前の風景、事物をありのままに言葉で表現するというものである。

晩年はほとんど寝たきりとなったが、病床でも多くのすぐれた作品を残している。

弟子の育成にも積極的に取り組み、伊藤左千夫ら多くの門人を育て、その「客観写生」の歌風は、後の短歌に大きな影響を与えた。

明治三十五年、三十六歳の若さで亡くなった。

正岡子規の代表歌

くれなゐの　二尺伸びたる　薔薇の芽の　針やはらかに　春雨の降る

二尺ほど伸びた真っ赤なバラの芽、まだ若くしなやかなトゲ、そこに静かにやわらかく春の雨が降りそそいでいる。

いちはつの　花咲きいでて　我目には　今年ばかりの　春行かんとす

今年もイチハツの花が咲いた。私が見ることができるのは今年が最後になるであろう……そんな花の咲く春も過ぎ去ろうとしている。